多文化共生とは思っていても・・・
排外主義の気持ちは日本人の貧困から来るのではないか

２０２５年9月　西尾　綾子

この８月、連れ合いが都内の病院に入院し、埼玉の自宅から連日都内に通った。上野駅や東京駅周辺を歩いていると、外国人観光客の多いこと多いこと。大きなスーツケースを引いた家族連れやグループが歩道の真ん中にスマホを見ながら立ち止まっている。こちらは急いでいるのに、邪魔だなぁとつい思ってしまう。バス停に並んでいると、列の前方に割り込んでこようとする外国人観光客がいる。えー、ちゃんと並んでくださいよーと心の中で叫ぶ。ホームに滑り込んできた山手線、ドアが開くと外国人観光客がどーんと目の前に立っている。駅周辺で昼食を食べようと飲食店を探すも、手ごろな値段の店が少ない。ラーメンも高くなったし、上野駅そばのラーメン店も、東京駅地下街のラーメン店も、外国人観光客がたくさん並んでいる（日本人も並んでいる）。値段が高めでちょっと入るのを躊躇するお店に、何のためらいもなく外国人観光客が入っていく。

連れ合いと同室の７０代の男性患者が、「そろそろ仕事に行かないといけないので、早く退院したい」と看護師に話している声がカーテン越しに聞こえる。この方ぐらいの年齢なら、定年退職して退職金と年金で悠々自適な暮らしをしていてもよいはずなのに、今の日本は７０代どころか８０代で働く人も多い。働かざるを得ない。手術をした後なのに、早く職場に復帰しないといけないと焦る声を聞き、切なくなった。

高齢者だけではない。若い人たちの暮らしも大変だと思う。今から３５年くらい前、私が大学生の頃は卒業旅行で海外に行く学生が多かった。私は海外へは行かなかったが、就職前の卒業旅行でヨーロッパに行った友達も結構いた。学費と生活費を自分で稼ぐ苦学生もいたが、スキー旅行やブランド品を買うためにアルバイトをしていた学生も多かったと思う。それが、今の大学生の多くは、学費と生活費を稼ぐためのアルバイトで忙しい。卒業後は奨学金返済で海外旅行どころではないと聞く。物価高も追い打ちをかけている。この３０数年で、日本人の暮らし向きは下降線をたどり続けてきた。「働けど働けど猶（なお）わが生活（くらし）楽にならざり　ぢつと手を見る」は石川啄木の有名な短歌だ。この歌に共感する日本人は、今、とても多いのではないか。１００年以上前に詠まれた歌なのに。

とにかく皆、必死に働いている。今も昔も朝から晩まで働いている。それなのに、入ってくるお金も、手元に残るお金も、少ない。入ってくるお金が少なくなったのに、税金や社会保険料はがっぽり取られるので、さらに手元が寂しくなる。国民健康保険料を払ったら病院に行くお金が残らない。物価高もあり外食の機会を減らすしかない。以前は昼にワンコイン定食をやっていた居酒屋が、最近は高級志向に鞍替えしてしまった。ファストフード店も、セットではなく単品を買って我慢する。最後の切り札のコンビニおにぎりまで最近は高級志向だ。アイスクリームも高くなった。自販機のジュースやお茶も。

おまけに円安で、海外に行けない。なのに、インバウンドで日本に来る外国人が増えた。日本に住む外国人も増えたが、特に都心や観光地にいる外国人観光客について言えば、経済的余裕があって日本に来ているので、日本でお財布の中身を気にせず美味しいものを食べ、欲しいものを買い、あちこちに行って存分に楽しんでいる。それは日本人にとってもありがたく喜ばしいことなのだが、いかんせん、日本人の暮らしが苦しいので、観光や食事や買い物を堪能している外国人に比べて、私たちは随分貧しくなったのだなということを、まざまざと痛感させられる。

かつて、日本人が大挙して海外ツアーに出かけていき、高級品を買い、高級料理を食べ、大量のお土産を買ったり、中にはマナーの悪さに現地の人からひんしゅくを買うようなこともあったと聞く。それが今、日本人は海外に行けなくなり、逆に海外から日本に来ている外国人観光客が、かつて私たちが海外でしていたのと同じようなことをしている。完全に立場が逆転してしまった。

自分たちの暮らしが苦しいのに、海外からのお客さんたちはなんて裕福で楽しそうなんだろう、なんだかむかつく……そう思ってしまう。都心や観光地の外国人観光客が多いところでは特に。排外主義はもちろん良くない。しかし、インバウンド効果で来日した外国人が目の前で自分に手が届かないものを手にしているのを毎日目にしていると、うらやましいを通り越してむかついてしまう、という心理はあると思う。日本人の暮らしに余裕がなくなったことも、外国人を敵視する排外主義の土壌にある程度含まれているのではないかと考える。

（埼玉県鴻巣市会議員　西尾綾子）